経営探訪
Management Report

株式会社 こばと

あらゆる人の垣根をなくす 第一歩となる店舗開業

優しい社会を目指して 健常者も障がい者も集う、 温かい場所を作りたい。

男鹿市船越駅に程近く、木の温もりを感じさせるかわいらしいお店がある。店名は「コバトのコトバ」。駄菓子やおしゃれでユニークな雑貨が陳列されている店内には、パン工房も併設。店舗で製造されているコッペパンは常時30種類ほどのメニューが展開されている。このお店を運営するのは、介護や障がい者支援事業を展開する株式会社こばと。代表の船木直子さんにお話を伺った。

大好きな祖父の死が 介護の道へのきっかけに

男鹿市出身・船木さんの人生のターニングポイントは、大好きな祖父の死だった。

「私が高校生のころ、祖父が脳梗塞とパーキンソン病を発症しました。当時、介護保険制度もなく、ケアマネージャーという存在も訪問介護もなく、自宅にいることもあれば入院していることもありました。私も祖母も『治療すれば治る』と思っていたんです。リハビリの考えもなく、歩くと転倒して怪我をするからと祖父は寝ているか、座っているかのどちらかでした。徐々に口から食事を摂れなくなり、流動食になって。そんな辛くて苦しい闘病生活を送ったのに、亡くなったとき、祖父は足が硬直して棺桶に入らなかったんです。穏やかで優しい祖父がこんな仕打ちをうけなければならないことがショックでした」。

当時、専門学校を出て薬局の調剤事務の仕事に就いていた船木さん。祖父の死をきっかけに介護ヘルパー２級を取得し、介護の道へと歩き始めた。

一人ひとりに合わせた対応 訪問介護のやりがい

訪問介護やデイサービス、介護施設などでの経験を経て32歳のときに第二種運転免許を取得。父が経営していた有限会社船木自動車に介護タクシー事業や家事代行サービスなどを行う新部門「こばとケアサービス」を設立した。

「訪問介護をやりたいと思ったのは、一人ひとりとじっくりお話ができて、その方に合わせた介護ができるから。どんな人でも楽しみがなければ生きていく意味が感じられなくなってしまうと思うんです。訪問介護でその方にどんな手助けをすれば、希望を叶えられるのかを考えて寄り添っていければと思いました。認知症は誰でもなってしまう可能性があります。でも、病気に対して世間の風当たりは強いし、社会から隔離されてしまう風潮がある。辛いのは社会との繋がりがなくなることだと思っています」。

店舗内の工房で製造されているコッペパン。おかず系やスイーツ系など、バリエーションが豊か。

職員がサポートしながら、利用者がラスクの袋詰を行っている。
働くことで社会との繋がりを感じて欲しいと船木さん。

❶おしゃれなカフェのような店舗に、ロゴマークの雰囲気がぴったりだ。
❷モルタルと白い壁に、無垢の什器。そこにはカラフルな雑貨や駄菓子が陳列されている。

船木さんは少しでも優しい社会を実現するため、令和４年12月に「コバトのコトバ」を開業。すべての人の垣根を払い、繋がれる場所を目指している。

元気の源は社会との繋がり すべての人とのコミュニティを

「コバトのコトバ」は就労継続支援B型の認可を受けた施設で、店舗内にパン工房を併設。パンづくりや店舗で販売するお菓子の梱包作業などを利用者に依頼している。現在、登録利用者は18名ほど。身体・知的・精神の障がいを持つ人を受け入れている。

「１時間でもいいんです。自分が作ったものを販売していること、自分が社会と繋がっていると感じてもらいたい。ここには雑貨や駄菓子も販売しているので、健常者も子どもたちも来ます。年齢も性別も障がいも関係なく、みんなが繋がれる場所になればと思っています」。

このお店は船木さんが描く、優しい社会を具現化した場所だ。介護事業の新しいカタチが男鹿に生まれていた。

株式会社 こばと
代表取締役 船木 直子

〒010-0341
男鹿市船越字前野12-1
TEL:0185-27-8031
FAX:0185-27-8032

◎業務内容
訪問介護事業、就労継続支援B型事業所運営